
ウロボロス

ゲー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウロボロス

【Nコード】

N8481D

【作者名】

グー

【あらすじ】

時は現代。50年前の大戦で使われた原爆による放射能の影響で人々がゾンビ化するという現象が起こったが、それを狩る者達がいる。そのため世界は混乱に陥らなかった。その者達は世界に圧力をかけ、今や世界を手に握っていると言っても過言ではなかった。その者達を知るものは畏敬の念を込めてこう呼ぶ。【ウロボロス】と

青年と死者の群れ

……時は現代

一人の青年が数十人のものと向かい合っている。そのものたちは一様に気が無く、緩慢な動作であり、虚ろな目をしており、そして何よりそのものたちの身体は土気色をしており、腐っていた。

……50年前に起こった対戦でアメリカが日本に使ったの原爆による影響で放射能に汚染された生物がゾンビ化する現象が続いていた

ゾンビたちと対峙している青年はこの場にそぐわない格好であった。見た目は18歳ぐらいと若く、深く吸い込まれそうな黒の瞳に艶のある黒髪を整髪料でセットし、意志の強い切れ長の目、すっきり通った鼻筋、薄い桃色の唇、とまだ少し幼さを残してはいるが、紛れもない美青年であった。その青年は遠目からでもわかる無駄のない筋肉を纏っており、一目でただ者ではないとわかるが、数十倍の人数を相手にするにはあまりにも軽装であり、そしてなによりその顔には薄く笑みさえ浮かべており、これからコンビニでも行こうかという気軽さであった。

……その現象は日本から全世界に広がっていったが、不思議と表沙汰にはならず世界が混乱することはなかった。

青年はおもむろにポケットに手を入れると、数十体のゾンビの群れに向かって歩き出した。まるでゾンビなど見えないかのような足取りである。しかし突然その青年の姿が消えたかと思うとその姿はゾンビの群れの中心あたりの上空に浮かんでいた。

……その理由は同時期に突如発生した異能の力を持つものたちがゾンビたちを駆逐し、国家に圧力をかけ情報操作をしてきたからである。

青年はポケットから手を取り出した。その拳はうつすらと紅い光を纏っているようだ。その拳を下にいるゾンビに向け、音量は決して大きくないが、地を揺るがし聞こえてくるような深みのある声で叫んだ

「爆ぜろ、神の槌　　《爆神槌》」

拳がゾンビに当たり、そのゾンビは突如爆音とともに弾け飛んだ。そしてそこから放射状に全てのゾンビに爆発が広がっていき、爆音が間断なく響く。それはまるで心地よい音楽を聴いているようだ。しかしその爆音に時折混ざるゾンビたちの苦悶の声がそれを台無しにしていた。やがてゾンビたちの声と爆音がおさまり、爆発によって起こった煙が風により晴れると、そこに立っているのは青年だけであり、その足元にあるはずのゾンビたちの亡骸はなぜか跡形もなく消え去っていた。

……はじめは日本の一都市だけであったが、ゾンビ化が世界に広がるとともに異能の力を持つものも世界に広がり、国家に圧力をかけ続け、いまや世界はその異能の力の者達の手にあると言っても過言ではなかった。

「最近雑魚ばかりだな。“仕事”に張り合いがない」
青年はそう不満げに呟くと元来た道を歩き出した。どうやらゾンビ退治が目的であったようだ。その足取りは来たときと変わりなく、足元にあるはずのゾンビたちの亡骸も消えているため、まるでどこで何もなかったようである。

……その異能の力を持つ者達をその者達を知る人たちは畏敬の念を込めてこう呼ぶ

そしてその青年の姿はゆっくりと闇に消えていった。

……【ウロボロス】と……

青年と受付嬢

東京の中心部にそのビルは位置する。

見た目は普通のビルと変わらないが行き交う人たちはそのビルに気付いていないようだ。

そのビルに向かって一人の少年が歩いている。その少年は見た目は18歳ぐらいと若く、深く吸い込まれそうな黒の瞳に艶のある黒髪を整髪料でセットし、意志の強い切れ長の目、すっきり通った鼻筋、薄い桃色の唇と明らかかな美少年であり周囲の人たちの視線を集めている。

しかし、その少年にはどこか影があり、ヒトを寄せ付けないような雰囲気纏っている。

周囲の人たちが声をかけてこない原因の一つだろう。

その少年がビルの敷地内に入った時、周囲の人々はとたんにその少年の姿が見えなくなったように、いや、元々いなかったかのようになまた動き出した。

「ようっ」

ビルの中は市役所のようになっており大勢の人がいた。

少年は慣れた様子で入っていくと一つの机に座っている黒髪を肩口で切り揃えた女性に話しかけた。

女性は少年が入ってきたことから声をかけられることを予測していたかのようだった。

軽く微笑むと少年に返事を返した

「おはようございます。本日はどのような御用件でしょうか」

「仕事の達成報告と報酬を貰いに来た」

「では『キューブ』はございますでしょうか」

「ほら」

そういうと少年は懐からルービックキューブくらいの大きさの黒い立方体を取り出し、受付に置いた。

女性はその立方体を両手でとり、見つめている。

突然女性の両手が光ったかと思うと女性は顔を上げ、少年のことを見つめ、キューブを返した。

「黒宮冬夜様でございますね。確かに『屍人』30体の撃破確認いたしました。報酬は振り込みでよろしいでしょうか？」

「ああ」

キューブを受け取りながら女性の問に少年・冬夜・は肯定の意を返した。

用件は終わったと冬夜が踵を返すと女性が冬夜の背に向かって声をかけた。

「黒宮様に飛鳥様より連絡をするよう伝言を預かっております。今日でしたら30分ほど前に2階にいらっしゃいましたか」

「わかった、ありがとう」

そう言うと冬夜は再び踵を返し2階に向かう階段へと歩いていった。しかしその表情は怪訝な顔をしていた。

それもそうだろう。何か用件があるならば携帯なに何なりで連絡すればよいのだ。それがなぜ『ギルド』の受付に頼むのかその理由がわからなかった。

まあ、2階ににいるという事だし直接問いつめてやればいいことかと思ひ、向かっているのだ。

2階は食堂でちょうど腹も減っていることだしちょうどいいかと思つたこともあつた。

それに飛鳥に会えると言うことで弾む心を抑えられない。逸る心を抑えきれずに早足にならないようにゆっくり歩こうと注意したらゆっくり歩きすぎて、周囲から奇異の目で見られてることに気付いていないようだ。

知らぬが花、とはこのことだ。

食堂の窓ガラスから目的の人物の姿を見つけ心が弾むのが自分でもわかつた。

そうして冬夜は食堂のドアを開け、中に入った。

青年と飛鳥（前書き）

遅くなりましたがよかったら見てください

青年と飛鳥

手折らば折れん、とはこのことだろう。

食堂のドアを開き、目的の人物を見つけた少年・黒宮冬夜・はそう思った。

食堂はそれなりに広く、昼時を少し過ぎたにも関わらず大勢の人で賑わっていたが、目的の人物はまるで光り輝いているかの様にその存在を主張していた。

肩甲骨の辺りまで伸びる色素の薄い髪。その下には大きな瞳、小さな鼻、柔らかそうな唇がある。腰は片腕で引き寄せても余りそうな位細く、控え目だが確かに存在する胸の膨らみが女性であることを証明している。

まさに深窓の令嬢といった表現が当て嵌まりそうな佇まいであった。冬夜は声をかけようと思い片手を上げるが、それより早く件の女性が立ち上がり両手を大きく振る。

「ヤッホー、冬夜！そんなところで突っ立ってないで早くこっち来なさい！」

「こんなところでそんな目立つまねをしないでくれよ。恥ずかしいだろ。」

冬夜は頬を赤らめながらその女性？飛鳥？の前の席に座る。

その頬の赤らみは羞恥によるものなのかそれとも飛鳥と会えたことによるものなのかはわからないが。

「なによ、せつかく久しぶりに会えたんだから少しは喜んでもいい

じゃない。それに私を捜してキヨロキヨロしたら恥ずかしいんじゃないかと思ったのに」

そう言い飛鳥は頬を膨らませ不機嫌そうに冬夜を見つめる。

その言葉に苦笑しながら冬夜は思った

喜んでいるよ、素直に表に出すのが恥ずかしいだけで。と

さらに、飛鳥姉のことを見逃すはずがないじゃないか、こんなに輝いているのに。とも

「全く。飛鳥姉は相変わらずだな。で、どうしたの？わざわざ受付に頼んだりなんかしたりして。いつものように『キューブ』で送ってくればよかったのに。」

『キューブ』は様々な機能を有する。見た目は5cm四方の黒い立方体にすぎないが現代科学でも解析できないところが多く、今現在でもその有する機能の半分程しか使用できていないという説もある。

第一に『屍人』の探査、その残骸の保管。

『キューブ』を展開すると現在地を起点に半径4km以内の『屍人』の反応を投影する。さらに『屍人』を討伐した際にその残骸を『キューブ』内に取り込み戦闘の痕跡を残さない。その残骸を受付係が確認し、仕事達成の証となり、残骸は確認した時点で消去される。

第二に

特定の相手の探査、通信。

携帯電話の電話帳、メール、TV電話を思い浮かべればわかりやすいだろう。その意志を持って『キューブ』に触れることで触れた者の生体反応が登録される。後は思い浮かべるだけで文章、映像を指定の相手に送信することができ、映像の場合は会話もできる。また、

半径4 km以内にいれば場所も探査することができる。

第三に

特殊能力の使用。

『キューブ』と適応できた者はその『キューブ』に秘められた力を解放し、使用することができる。はじめはその力のほとんどを使用できないが、熟練するに従い、使用できる力も増えていく。その力の種類は『キューブ』ごとに異なっており、『キューブ』に適応できるかは資質次第であり、一人で複数の『キューブ』を使用する者もいる。また、適応できない『キューブ』を使用しても何もおこらない。

今のところ判明している『キューブ』の機能は以上である。

「だってあれって味気ないんだもん。いいじゃん、こういうのもクラシックでさ。会えるか会えないかみたいなの？」

カラカラと笑う飛鳥の姿を見て冬夜は頭を抱える。

「はぁ・・・、まあいいか。それで、用はなんなの？」

「別にない」

「え？」

その言葉に冬夜は目を見開き飛鳥を凝視する。まさに目が点、という状態だろう

そんな様子を見て飛鳥は歯を剥き出しにして笑う。まるで悪戯が成功した子供の様に。

そしてまーまーと言いながらピラピラと手を振る。

「あつは。いいじゃない、久しぶりのキョウダイの再会なのよ？そうね、じゃあ一緒に『屍人』の討伐でも行かない？どれくらい強くなつたか見てあげるわよ。」

「全く飛鳥姉は、いつも何も考えてないんだから。」

額に手を当て天井を仰ぎ見る冬夜、腰に手を当て胸を張り天を仰ぐ飛鳥。

見ている方向は同一でもそこに込める思いは対照的であった。

一頻り気持ちの整理がついたのか冬夜はしっかりと飛鳥の瞳を見据える。

「でもそれはいい提案だね。今度こそ僕の力認めてもらおうよ」

青年と飛鳥（後書き）

感想、評価、誤字脱字の報告、アドバイスでも何か頂けたらうれしいです

青年と飛鳥と屍人と

綺麗だ、と冬夜は思った。

本当に綺麗だ、と冬夜は何度目かわからないほどの感嘆の溜息を吐く。

冬夜の視線の先には屍人と戦っている飛鳥の姿がある。

飛鳥はまるで舞うように鮮やかに屍人を葬っていく。その背には1対の銀色の翼があった。

その姿は飛鳥の容姿と相俟って屍人に罰を与える戦乙女か天使、いや、冬夜には神のようにすら思えた。

『銀翼』

それが飛鳥のキューブの能力であった。飛鳥は冬夜の知っている限りで3つのキューブを使用できるが『銀翼』は飛鳥がもっとも好んで使用するキューブであり、見た目だけではなくその能力も充分なものであった。

近距離では羽を広げ先端を刃のようにし触れるもの全て切り刻み、遠距離では広げた羽を散弾銃のように射出する。1本の羽を剣や槍に変化することもできるし、消耗が激しいようだが短時間の浮遊も可能なようだ。

「あははっ！冬夜く、冬夜の方もやっっちゃうよ〜。」

笑顔とともに向けられたその言葉に冬夜は苦笑する。相変わらずだな、と。

その数瞬後には鋭く目は細められ、口元は皮肉気に歪められていた。

「まあ見てなよ。」

そう言い冬夜は屍人の群れをその目にとらえ、右手掌を突き出す。そして言葉を紡ぐ。呟くようなその声は不思議に戦場に響き渡る。

「氷よ、霧の如く彼の陣を覆え??? 《霧氷陣》???」

言葉を紡ぎ終わった瞬間屍人の群れに白い霧が纏わり付く。その霧は氷となり、次々と屍人に突き刺さり、屍人は凍てつきその活動を停めていく。

「《粉碎》」

その言葉と同時に氷像と化していた屍人は粉々に砕け散り、周囲に氷の破片が次々と舞う。

その破片はきらきらと月の光を受け、幻想的な光景を映し出していた。

『言霊』

それが冬夜のキューブ能力だった。その名の通り口にした言葉が現象として現れる単純にして強力な能力なのだがその行使にはいくつかの制約が伴う。

一つ、現象の想像。『言霊』を使用する際にはその言葉でどのような現象が起きるのかを明確に想像しなければならぬ。たとえば氷山を想像しながら『火炎』と唱えたところで何も発現しないだろう。このように想像が不足していれば威力の低下や精神力の減少、現象が発現しないことも有り得る。詠唱は想像を固定するための重要な因子なのだ。逆に言えば詠唱が無くても想像が明確であれば言葉のみで発現する。それも無制限ではなく使用者のキューブ熟練度が関わってくるのだが……。次で詳しく説明しよう。

一つ、使用文字数の制限。最初は《火》や《氷》といった《1字》しか使えないがキューブの扱いに熟練するに従って《氷山》や《霧氷陣》のように扱える文字数が増えていく。基本的な法則としては限界使用文字数 - 1以下が詠唱破棄可能、限界使用文字数は詠唱付きで使用可能。しかし使用頻度が高く現象の想像が特に明確であれば詠唱破棄できることもある。限界使用文字数 + 1は詠唱と鮮明な想像により使用できることはあるが精神力の消費が激しく本来のものより現象が減退してしまう。

以上が今判明している『言霊』の使用に伴う制約である。

しかし、一人飛鳥は不満そうであった。唇を突き出しじと目で冬夜を見てさえいる。

「なによそんなもんなの？《三字》だって《二字》の《詠唱破棄》だって前からできてたじゃん」

「まさか、今のは準備運動だよ。あいつのための、ね」

それって？、と飛鳥がいかけたところで足下が激しく揺れ出す。一般人であれば立っているのは不可能であろうその揺れをもともせずふたりはしっかりと大地にその両足をつけている。

そして膨れ上がる気配。飛鳥はようやくここで敵の存在を発見した。

「なに？この気配。凄く・・・大きい・・・これってー・・・」

「来るぞ！」

冬夜の言葉と同時に二人の前の地面が盛り上がり地響きとともに『それ』が現れた。

先ほどまで殲滅していた屍人の軽く10倍の巨体、前額部に鈍く光る1対の鋭い角、隆起した筋肉。

一目で別格とわかる『屍人』であった。

「よりによって角付きとはね、飛鳥姉！全力で行くよ！」

「・・・あはっ！ちょっとびっくりしたけど了解！やっちゃんおうか
！」

二人と一体の視線が交錯し、戦闘が始まろうとしていた。

青年と飛鳥と屍人と（後書き）

放置しててすいません！と、謝るも、たのしみになっているひとはいるのだろうか？

ぜひ評価、感想、アドバイス等々お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8481d/>

ウロボロス

2011年10月3日20時45分発行